小説
グリーン教国02
世話のされ方
エリー

本文

＜カリンの夢＞

　むかしむかし、カリンという青年がいました。
　カリンは、人はどこからきてどこへ行くのだろうと考えました。
　答えは出ません。

　ある日、カリンは夢を見ました。それは神さまの夢でした。
　時間も空間も意識もない真っ暗な世界が輝きに満ちるとひとり神グリーンさまが生まれました。
　グリーンさまは、一人を悲しみました。世界は震え、内部が場所と生き物に分かれました。

　最初に生まれたのは、女神レッドです。
　続いて生まれたのが、男神ブルーです。
　二人は愛し合い、結ばれました。
　すると女神の子宮に宇宙が生まれました。
　そして、新しい神さまの細胞である生き物たちが生まれました。

　はじめは小さくて単純な細胞だった生き物が、やがて複雑になりさまざまな形にわかれていきました。
　あるものは力を増し全世界に広がり、　あるものは死に絶えました。
　そうして、生き物の中の一つとして人が生まれました。

　すべてはグリーンさまの慟哭から始まり、生まれては死に、歓喜の中でグリーンさまにかえっていく。

　目覚めたカリンは思いました。
　もしも人が神の細胞ならば、胎児の指が最初は丸で、間の細胞が死んで指の形になるように、死ぬことで意味を持つ人間がいるのだろうか。
　人を死へといざなうガン細胞のような敵対的な人間もいるのだろうか。

　女神レッドは、新しく生まれる神を愛し、「大きくなあれ」と祝福するが、その祝福は細胞である人間ひとりひとりに向けられたものなのだろうか。
　もしも生に役目があり、目的があるならば、自分の役目を知り、まっとうすることこそが生きるということなのだろうか。
　それとも、神の一部である前に、人は人として自由なのだろうか。

　あるものは活躍して重要な役目を果たし、地位と名誉と財産を得て充実した人生を生き生きと生きる。
　あるものは弱さを抱えて活躍することなく、グデグデとやり過ごし不遇の一生を終える。
　しかしどちらも必要な神の一部であり、生きているだけで意味を持ち、存在するだけで素晴らしいなら、生きていることは素晴らしい！

　人は食べて、出して、寝るだけで神の体の一部を作っている。
　いつか役目を終わり、人が死に絶える時がきたとしても、神の一部として生きた記憶は神に刻まれる。

＜グリーン教と三つの国＞

　カリンさまは思った。
　わたしは、この教えを子どもたちに伝えて、生きていることを大切にする国を作ろう。
　グリーンさまを信じるからグリーン教と呼び、グリーン教国と名付けよう。

　そうしてグリーン教国は生まれました。
　一番上の姉はグリーン教を広めるため北東に向かいレッド帝国を作り、女神レッドさまを祭りました。
　二番目の弟は姉同様に南西に向かいブルー共和国を作り、男神ブルーさまを祭りました。
　末の弟はグリーン教国に残り、国を受け継ぎ、ひとり神グリーンさまを祭りました。
　三国は協力し合って、仲良く暮らしました。

＜グリーン教国＞

　グリーン教国は、みんなで支え合う国になりました。
　しかし、自分の力を信じて挑戦する自由も大切なことを知っていたカリンさまは、生きることを中心とし国土を保護する保護区と、義務から解放し法律の下の自由を認める自由区に分けました。

　子どもは国の宝なので、育てる人がいない場合は１２歳まで保護区で世話します。
　どの子どもも１３歳から１５歳の間、寮に入って、管理区で保護区の人々のために働きます。
　卒寮すると保護区に入る資格を与えられます。
　そして、自由区か、保護区、どちらで生きるか問われます。
　１６歳で一人前の大人と認められるので、自分のことは自分で決めることができます。誰にも邪魔されません。

　自由区を選んでも、４０歳までは保護区に戻ることができます。
　保護区から自由区に出ることもできます。短期間に出入りすることは認められませんが、４０歳までに再び戻ることも可能です。しかし、４０歳を過ぎたら戻れません。
　もし、４０歳を過ぎて自由区で失敗して生きる手段が見つからない場合は、死ぬ自由を認めます。死の街で薬を与え、死体を処分します。

＜時代の移り変わり＞

　人力に頼っていた時代は、多くの人が保護区で食料を作って暮らしていました。
　しかし、機械が生まれ、電力が生まれ、コンピューターが生まれ、人工知能が生まれるとどんどん人手がいらなくなりました。

　飢えないように公平に食べ物を配っていた時代から、好きなものを好きに選ぶ自由が尊ばれる時代を経て、好きが重視されるようになりました。

　使う人と使うものが決まっている保護区では、計画的に生産されます。
　足りない時代は、古いものを直して使っていました。
　余るようになったら、働く時間を減らします。

　ところが、売ってお金を得なければならない自由区では、働くことをやめることができません。
　作る力が、使う人を上回った時、作っても売れないという混迷の時代に突入しました。

＜自由の犠牲になる人々＞

　住む家も、食べるものも、着る服も決まっていて、義務を果たさなければならない保護区の暮らしは、自分で楽しみを見つけないと地獄のような退屈さに押しつぶされます。
　新しいもの、珍しいもの、好きなものを選ぶ自由区の暮らしは楽しく、ワクワクします。
　卒寮していて４０歳以下で保護区に戻ることができるにも関わらず、自由区にとどまることを選び、死の街で薬を飲んで死ぬ人が大勢でました。

＜カリンさまの問い＞

　保護区では、子どもを育て、老人や病人の世話をし、自然を守るという義務があります。
　自由区は、弱者を世話するという義務がありません。自分のために生きて、自分のために死ねます。

指になる細胞と死んでいく指の間の細胞があるように、売れて成功する人と売れなくて死を選ぶ人がいました。

自分が選んだ結果なら仕方がないことなのでしょうか。
カリンさまが問うたことを、人びとは再び問い直しました。

＜さまざまな意見＞

ある人びとは、自由区で生きるすべての人に生活するために必要なお金を配って、売れても、売れなくても、死ななくてすむようにしたらどうかと言いました。

ある人たちは、自由を続けることが無理があるのだから、もう一度みんなが納得する暮らしを再設計し直そうと言いました。

ある人たちは、余るほど作ることは自然に負担をかけるから、自由区で生きる権利を問い、保護区で暮らすことを基本にしたらどうだろうと言いました。

つまり、働かなくても生きられるならば、働かないで何をするのかが問われているわけです。

働かないで好きなことをする自由を認めたならば、自由区で生きられるようにお金を配ったらよい。
その場合、成功を夢見て過剰に生産されてムダが出る問題は解決しません。人が資源を食い尽くしてしまうかもしれない。

保護区を基本として自由区を権利とした場合、無理矢理義務を課すことになる。やらない人も出てくるでしょう。
保護区の均質性が失われて、不平等になってしまう。

＜ボタンへの課題＞

みんながどうしていいか分からず、混乱していた時代に、グリーン教国の城下町にボタンという女の子が生まれました。

ボタンは質問好きの女の子で、城の貧民街で有名なシラカバという老人が大好きでした。
シラカバの話を聞いて、感想を言ったり、質問したりして過ごしていました。

ボタンがシラカバと対話している様子を見た、グリーン教国の王子マロニエとレッド帝国の王女ローズとブルー共和国の資産家の息子ハシバミが、ご学友としてボタンを城に招きました。
４人は、７歳で出会って一通り文字や計算を教わると、それぞれ好きな本を読んで自習して過ごしていました。
そして、何か問題があるとシラカバのところに行くのでした。

そんな暮らしが１１歳まで続きました。
１２歳になる春、１３歳から入寮するための健康診断を受けました。
そこでボタンは、体が弱く、工場で働けないだろうと言われました。

弱者認定を受けたボタンには、三つの選択肢が残されています。
共同作業を免除されて入寮し、工場で事務作業をして働き、卒寮して、条件付きで保護区に入る。
弱者として管理区のグループホームで暮らし、短時間の軽作業をする。
自由区に出て、自分の力で好きに生きる。

ボタンは、三つとも選びませんでした。
歴史の本が好きなので、城の図書館にある電子化されていない古い資料が見たくて、城に残りたいと言いました。

動き過ぎると便が漏れるため、共同作業を免除されても、共同生活をする入寮は困難だと分かっていました。
卒寮して資格試験を受けて城に入ることは難しい。
しかし、ご学友だからといって特例を認めたら不公平です。

もし、混迷の時代に終止符を打つ答えを見つけたならば、功績を評価して特例を認めよう。
ボタンは、課題を受けることにしました。
そして、マロニエ、ローズ、ハシバミ、シラカバの力を借りて、答えを出すことに決めました。

＜世話のされ方＞

ボタンは言いました。
これは「世話のされ方」という問題だと思う。
健康な人も、自分のことをすべて自分でしているわけではない。必ず誰かの世話になっている。
「世話になること」と「自由を認めること」のバランスの問題だと思う。

たとえば、家を建てて安全に快適に眠ることができる場所を確保することは、誰でもできることではない。
お金を出すことはできても、家を建てることは分からない。
また必要な木を育てることも、その木を加工して材木にすることも、自分ではできない。

自分ではできないことを他人に頼る時、する側とされる側という立場の違いがあらわれる。
する側になることがあれば、その人は社会の一員として役割を果たしていると言える。
頼ることしかなければ、生きることが仕事と言える。弱者と認定される。

体が弱くて働けないという弱者は、どうにもならない問題として受け入れてもらいやすい。
しかし、好きを満たせず仕事がないという弱者は、努力の問題とされて受け入れられない場合が多い。

もし、モノが足りなくて、一定の水準を保てば必ず売れるのならば、作っても売れないという問題は起こらない。
しかし、少人数で大量に良いものを安く生産できるようになれば、競争に敗れて仕事を得られない人が出てくる。
そういう場合の弱者は、敗者という烙印を押されてしまうため、二重の苦しみを背負う。

わたしは、好きに選ぶ自由を認める限り、「選ばれない」という問題はなくならないと思う。
そして、お金を配って最低限の生活を保障したとしても、「選ばれないからもらった以上に収入が増えないために自由が制限される」という問題が起きる。
好きなものを選んでワクワクして生きるより、与えられた範囲で満足することを目指さない限り、混迷は静まらないと思う。
つまり、信者として模範を守る生き方をよしとする教えを復活させることが、解決の鍵だと考える。

マロニエは、小さなことをにこだわらず、大きな視点で見るのは大切だから賛成すると言いました。
ローズは、好きなものをあきらめて生きるくらいなら死んだ方がましだから反対と言いました。
ハシバミは、僕は好きな人のそばにいられたらそれで満足だからどちらでもいいと言いました。

シラカバは、しばらく黙っていましたが、重い口を開きました。
確かに金の力で好きに振る舞うことには問題が多い。しかし仮に模範を定め直すならば正当性

が問われるだろう。
　信者の鑑として認められたリーダーが、カリンさまの教えを受け継ぎ、時代に合わせて発展するものが必要だ。
　言葉だけじゃない。行動で示すことが求められる。考えて終わりじゃない。

　シラカバは、マロニエを真っ直ぐ見ました。
　マロニエはグリーン教国を継ぐ王子だ。わしはきみこそがふさわしい人物だと思うがね。

　マロニエは答えました。
　俺にとっても課題ならば、取り組みがいがあるというものです。

　ボタンがみんなを見て言いました。
　基本方針が決まったので、一つずつ問題を整理していきましょう。

メモ

＜時代設定＞

　20180701am2:17-am4:05に原稿用紙に書いた文章が土台になっています。
　今までのまとめを一気に書きなぐった感じです。

　ここから詳細に入っていくのですが、何をどう取り上げればいいのか今はよく分かりません。
　概要だけが決まった状態です。
　やっと始める準備ができたところです。
　ちゃんと終わりまで書けるといいのですが(´・ω・`)

　カリンさまの時代から一気に時間を圧縮し、「近未来」まで飛ばすことにしました。
　問いたいのは現実の問題なんだから、中世を舞台にする意味がないことに気づいたから。

　たとえば、ボタンは動き過ぎると便が漏れるという問題を抱えています。
　だから、入寮を免除されます。
　もし中世の設定にしたならば、布おむつしかありません。
　体力がないボタンは、「漏れた尿や便の始末をして、手洗いした後で水をはったバケツにつけて、まとめて石鹸を使い洗濯板で洗って、干して、たたむ」ができませんから世話してもらうことになります。
　そういった世話をしてくれる人は、管理区のグループホームにはいますが、城にはいませんから、選択の余地なく弱者としてグループホームで暮らすしかありません。

　しかし、現代は紙オムツがあるので、自分で洗えなくても困りません。
　ボタン一つでお湯が出るシャワー設備があれば、クリーム状の便がべたべたにお尻についてしまっても、お湯で洗い流すことができます。
　共有設備で便を洗い流すことには抵抗がありますが、ワンルームマンションのようなバス・トイレ付きの自分専用の部屋ならば、気兼ねすることはありません。

　中世設定にして、布オムツの世話をされることをどう思うかを問題にしても、現代では解決しているのであまり意味がありません。
　だから、近代化されていることにしました。

＜保護区と管理区と自由区の特色＞

　保護区の聖域では、原始的な生活をしている。徒歩で移動し、ナタと弓で自給が基本。

米と味噌を受け取り、手作りの小屋を拠点に、野生動物や樹木を見回っている。

保護区の山奥では、中世的な電気のない生活をしています。
信者として信仰を大切にする暮らしをしています。
主な燃料は木です。
住みついて国土を見張っていることに意味があるので、精神修行が基本です。
食べ物は車で運ばれてきたものを受け取ります。
聖域で原生林を見守るレンジャーのサポートも役割です。

街に近い保護区では、機械化された生活を送っています。下水道も電気もガスもあります。
基幹産業を持ち、労働力を提供することで保護区の維持に参加しています。
車の入れる道が整備された林業のための山を管理する里山タイプと、米や野菜を作る農地を持った田舎タイプがあります。
家電があれば一人で暮らせる人は、ここで世話されます。

保護区の一種である管理区では、城や工場や農地などがあって、自由区に住んでいるサポート労働者が働いています。
一人暮らしができない人を世話をするグループホームがあります。
看護が必要な病人を世話する病院もあります。
鉄道などの交通網も管理区として扱われます。

自由区は、近未来的な都市生活をしています。
全自動でいろんなものが動く不思議な世界。
歓楽街の隣には、保護区の人が管理する死の街がある。

＜端末と教育＞

端末は一人一台与えられる。
通信機能やGPS機能がついている。
身分証の役割を果たしている。

衛生通信があるので、ネットワークは保護区の聖域でも使える。
端末はソーラー発電で充電しているが、端末以外に電気を使うことはない。

教育は自習が基本なので、勉強しなくて読み書き計算ができない人もでてくる。
文字が読めなくても、端末は音声で動かせるのでそんなに困らない。
計算も、端末に命令すればしてくれるのでそんなに困らない。

自分がやりたいことがやれればそれでよしと考える。

さらに勉強したい人は、卒寮資格を得た後、管理区の試験を受けて専門教育を受ける。
あるいは、自由区でお金を出して学校に通う。
端末を利用した映像授業とレポートの提出で通信教育もさかん。